

5.13 [土]

第197回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール / 14時開演
Saturday Matinée Series, No. 197
Saturday, 13th May, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

5.14 [日]

第197回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール / 14時開演
Sunday Matinée Series, No. 197
Sunday, 14th May, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮 / オンドレイ・レナルト Conductor ONDREJ LENÁRD P.5

ピアノ / ケイト・リウ Piano KATE LIU P.8

コンサートマスター / 荻原尚子 Concertmaster NAOKO OGIHARA
※当初発表の指揮者から変更となりました。

ショパン ピアノ協奏曲 第1番 ホ短調 作品11 [約40分] P.9
CHOPIN / Piano Concerto No. 1 in E minor, op. 11

- I. Allegro maestoso
- II. Romanze : Larghetto
- III. Rondo : Vivace

[休憩 Intermission]

ベートーヴェン 交響曲 第3番 変ホ長調 作品55 〈英雄〉 [約47分] P.10
BEETHOVEN / Symphony No. 3 in E flat major, op. 55 "Eroica"

- I. Allegro con brio
- II. Marcia funebre : Adagio assai
- III. Scherzo : Allegro vivace
- IV. Finale : Allegro molto

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
[事業提携] 東京芸術劇場

※5月13日公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。



文化庁

5.19 [金]

第568回 定期演奏会
東京芸術劇場コンサートホール / 19時開演
Subscription Concert, No. 568
Friday, 19th May, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮 / ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー (名誉指揮者)
Honorary Conductor GENNADY ROZHDESTVENSKY P.6

コンサートマスター / 長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA
※当初発表の指揮者から変更となりました。

ブルックナー 交響曲 第5番
変ロ長調 WAB 105 (シャルク版) [約63分] P.11

BRUCKNER / Symphony No. 5 in B flat major, WAB 105 (Schalk edition)

- I. Adagio - Allegro
- II. Adagio
- III. Scherzo : Molto vivace
- IV. Finale : Adagio - Allegro moderato

※本公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。

*No intermission

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
[協力] アフラック
[事業提携] 東京芸術劇場



文化庁

Maestro of the month

オンドレイ・レナルト

Ondrej Lenárd

親日家のマエストロ
久しぶりに登場



©Petr Hornik

スロヴァキア出身で日本とも縁の深いマエストロが、久しぶりに読響の指揮台に登場する。プログラムはベートーヴェンの〈英雄〉交響曲とショパンのピアノ協奏曲第1番(ピアノ独奏=ケイト・リウ)という名曲同士の組み合わせ。どんな芸を見せてくれるのか。

1942年スロヴァキア生まれ。ブラチスラヴァ音楽大学で学んだ後、同地のスロヴァキア国立歌劇場の合唱・オペラ指揮者に就任し、84年から86年に首席指揮者を務めた。また、70年から旧チェコスロヴァキア放送響の指揮者も兼任し、77年から90年には首席指揮者の地位にあった。コンサートとオペラの両方で幅広く活躍し、ウィーン国立歌劇場、米国ヒューストンのグランド・オペラ、ナポリのサン・カルロ劇場、ブダペスト国立歌劇場、プラハ国立歌劇場などのほか、欧米のオーケストラに数多く客

演している。ドヴォルザークやスメタナといったレパートリーに加え、ベートーヴェン、ブラームス、チャイコフスキー、マーラーなどの指揮で評価が高い。

日本とも縁が深く、88年から99年まで旧新星日響(現東京フィル)の首席客演、首席指揮者を歴任し、現在は東京フィルの名誉指揮者を務めている。読響などにも客演した。91年から2001年までスロヴァキア・フィルの首席指揮者、11年からプラハ放送響の首席指揮者を務めている。

◇5月13日 土曜マチネーシリーズ
◇5月14日 日曜マチネーシリーズ

5.26 [金]	第602回 名曲シリーズ 東京芸術劇場コンサートホール/19時開演 Popular Series, No. 602 Friday, 26th May, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
5.27 [土]	第96回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール/14時開演 Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 96 Saturday, 27th May, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall
5.28 [日]	第5回 パルテノン名曲シリーズ パルテノン多摩大ホール/15時開演 Parthenon Popular Series, No. 5 Sunday, 28th May, 15:00 / Parthenon Tama in Tama-center

指揮/尾高忠明(名誉客演指揮者) Honorary Guest Conductor TADA AKI OTAKA P.7

ハープ/グザヴィエ・ドゥ・メストレ Harp XAVIER DE MAISTRE P.8

コンサートマスター/小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

芥川也寸志 弦楽のための三楽章〈トリプティーク〉 [約13分] P.14
AKUTAGAWA / "Triptyque" for String Orchestra

- I. Allegro
- II. Berceuse : Andante
- III. Presto

ロドリゴ アランフェス協奏曲 (ハープ版) [約21分] P.15
RODRIGO / Concierto de Aranjuez (ver. Harp)

- I. Allegro con spirito
- II. Adagio
- III. Allegro gentile

[休憩 Intermission]

ブラームス 交響曲 第1番 ハ短調 作品68 [約45分] P.16
BRAHMS / Symphony No. 1 in C minor, op. 68

- I. Un poco sostenuto - Allegro
- II. Andante sostenuto
- III. Un poco allegretto e grazioso
- IV. Adagio - Più andante - Allegro non troppo ma con brio

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団(5/26、27)
多摩市文化振興財団、読売日本交響楽団、読売新聞社(5/28)

[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)(5/26、27)
平成29年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業(5/28)

[事業提携] 東京芸術劇場(5/26)

[協力] 横浜みなとみらいホール(5/27)



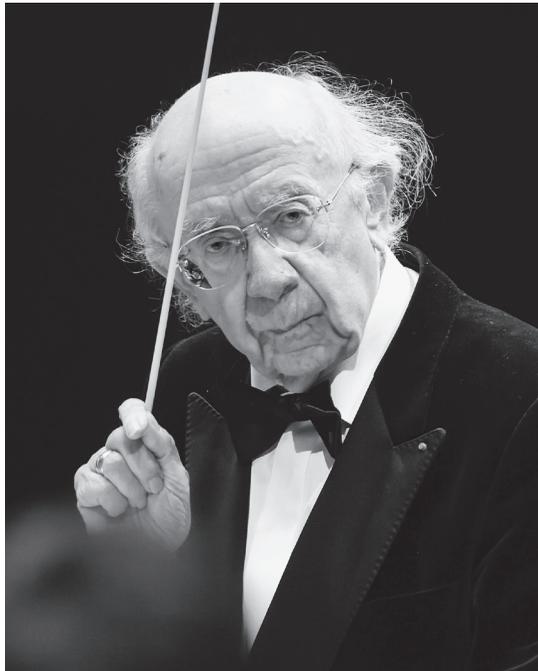
ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー

(名誉指揮者)

Gennady Rozhdestvensky

絶大な人気を誇る巨匠
注目のブルックナー

昨年9月の定期演奏会で4年ぶりに読響に客演し、ショスタコーヴィチの交響曲^{ゆうよう}で悠揚迫らぬ風格を聴かせた。その巨匠が、今度はブルックナーの交響曲第5番で指揮台に立つ。近年ではめったに演奏されず、自身の全



©読響

集録音でも取り上げなかったシャルク改訂版を用い、作曲家の壮麗なる音楽の神髄を描く。ロシアの巨匠が聴かせる新たな境地に、期待が高まる。

1931年モスクワ生まれ。名門モスクワ音楽院で、父親であり著名な指揮者でもあったアノーソフに師事し、弱冠20歳でチャイコフスキーの〈くるみ割り人形〉をボリショイ劇場で振ってデビュー。61年にモスクワ放送響、65年にボリショイ劇場の音楽監督となり、数々の海外公演でたちまち世界的に知られる存在になった。83年にソ連政府が設立したソヴィエト国立文化省響の音楽監督

に就任。ショスタコーヴィチやグラズノフの交響曲全集を録音し、世界的名声を得た。BBC響、ウィーン響、ロイヤル・ストックホルム・フィルの首席指揮者を務めたほか、主要オーケストラにたびたび客演。2000年から01年にはボリショイ劇場の芸術監督も務めた。

読響には1979年に初めて客演して以来、ショスタコーヴィチ、グラズノフ、プロコフィエフ、ストラヴィンスキーなどロシア音楽のスペシャリストとして共演を重ね、根強いファンを持つ。90年に名誉指揮者に就任した。

◇5月19日 定期演奏会

尾高忠明

(名誉客演指揮者)

Tadaaki Otaka

名匠が挑むブラームス
芥川也寸志の作品も

読響の名誉客演指揮者を務める名匠が、ブラームスの交響曲第1番を披露する。組み合わせたのは、芥川也寸志の初期の代表作と世界的ハープ奏者メストレを迎えてのアランフェス協奏曲。三者三様のキャラクターを描き分ける腕前に注目したい。

1947年鎌倉生まれ。桐朋学園大学で齋藤秀雄に師事し、70年に第2回民音指揮者コンクールで第2位に入賞。オーストリア政府から奨学金を得てウィーン国立アカデミーに留学し、指揮をスワロフスキーに、オペラ指揮法をシュパンナーゲルに学んだ後、東京フィル常任指揮者(74~91年/現桂冠指揮者)に就任。BBCウェールズ響首席指揮者(87~95年/現桂冠指揮者)を務め、エルガーやブリテンなどのイギリス音楽を手がけた。

読響では92~98年に常任指揮者を務め、数々の名演を生んだ。札幌響音楽



©読響

監督(2004~15年/現名誉音楽監督)、メルボルン響首席客演指揮者(10~12年)、新国立劇場オペラ芸術監督(10~14年)を歴任。今年4月から大阪フィルのミュージック・アドバイザーに就任した。客演指揮者としては、国内の主要オーケストラはもちろんのこと、ロンドン響、BBC響、ベルリン放送響など、世界各地のオーケストラを指揮している。また、東京芸術大学名誉教授、相愛大学、京都市立芸術大学音楽学部客員教授、国立音楽大学^{しょうへい}招聘教授を務めている。

◇5月26日 名曲シリーズ
◇5月27日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
◇5月28日 パルテノン名曲シリーズ

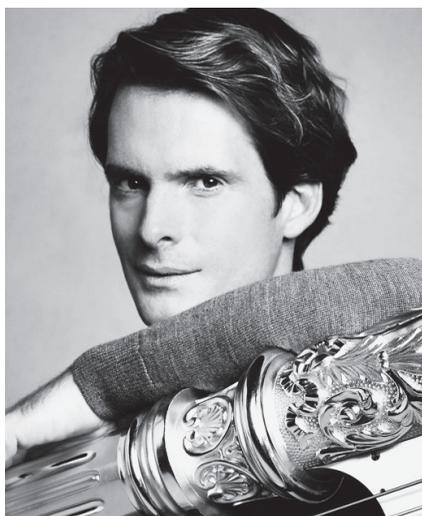


ピアノ ケイト・リウ

Piano Kate Liu

2015年にワルシャワで開かれたショパン国際ピアノ・コンクールで3位に入賞し、一躍、注目を集めた。1994年にシンガポールで生まれ、8歳の時にアメリカへ移住した。現在はフィラデルフィアのカーティス音楽院で学んでおり、ダン・タイソンにも師事した。これまでにアメリカや韓国のコンクールで優れた成績を取め、ショパン・コンクールでは秀逸なマズルカ演奏に与えられる「マズルカ賞」も受賞。ニューヨークのカーネギーホールでリサイタルを開き、北米各地でオーケストラと共演を重ねている。読響初登場。

◇ 5月13日 土曜マチネーシリーズ
◇ 5月14日 日曜マチネーシリーズ



©Gregor Hohenberg / Sony Classical International

ハープ グザヴィエ・ドゥ・メストレ

Harp Xavier de Maistre

フランス・トゥーロン生まれ。9歳からハープを学び、世界の主要なコンクールで数々の賞を受賞して注目を浴びた。バイエルン放送響のソロ奏者を経て1999年、25歳でウィーン・フィルのソロ奏者に就任した。2010年に退団後はソリストとして活躍し、イスラエル・フィル、バイエルン放送響など多くのオーケストラと共演したほか、ザルツブルク音楽祭など欧米の主要な音楽祭から招かれている。またソニーBMGの専属アーティストとして多数のCDを出している。昨年1月に続き、2年連続での読響登場となる。

◇ 5月26日 名曲シリーズ
◇ 5月27日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
◇ 5月28日 バルテノン名曲シリーズ

5.13 [土]

5.14 [日]

道下京子 (みちした きょうこ)・音楽評論家

ショパン ピアノ協奏曲 第1番 ホ短調 作品11

作曲：1830年／初演：1830年、ワルシャワ／演奏時間：約40分

しばしば「ピアノの詩人」と呼ばれるフレデリック・ショパン（1810～49）。人生の前半を祖国ポーランドで、そして後半生をフランスで過ごした。

1829年夏、ワルシャワ音楽院での勉強を終えたショパンは、ウィーンを訪れて演奏会に出演し、話題を呼んだ。ワルシャワへ戻った彼は、まずホ短調のピアノ協奏曲の作曲を始め、翌年3月に初演した。続いて、ホ短調のピアノ協奏曲の創作に着手し、同年10月に開催された告別音楽会で彼自らがピアノ独奏を担当した。このホ短調のピアノ協奏曲が先に出版されたため、第1番と数えられている。

ピアノ協奏曲第1番は、とくにピアノと管弦楽の書法やピアノ独奏の表現などで、作曲家フンメルやフィールドなどからの影響を受けている。同時に、彼がこれらの作曲家の作品を土台と

し、独自の個性を確立した点で、ショパンの創作史上重要な意味をもつ。作品は、ショパンのパリ・デビューに協力したカルクブレンナーに捧げられ、シュレサンジェ社から出版された。

第1楽章 アレグロ・マエストーソ ホ短調。冒頭にオーケストラによる堂々とした第1主題、続いて表情豊かなホ長調の第2主題が示される。その後、ピアノ独奏が主題を改めて奏でる。

第2楽章 ロマンズ：ラルゲット ホ長調。弦楽器による夢想的な前奏に導かれ、ピアノ独奏が主旋律を歌い上げてゆく。ノクターンのような趣を湛えた緩徐楽章。

第3楽章 ロンド：ヴィヴァーチェ ホ長調。序奏ののち、ポーランドの民俗舞踏クラコヴィアクを採り入れたロンド主題をピアノが提示する。生気がみなぎるフィナーレ。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ベートーヴェン 交響曲 第3番 変ホ長調 作品55 〈英雄〉

作曲：1803年／初演：1805年、ウィーン／演奏時間：約47分

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が交響曲の作曲を手掛けるのは、1792年に故郷のボンからウィーンへ移り住んで以降である。彼が最初の交響曲を作曲するのは1800年。しかし、その前から難聴の症状が顕著になり、1802年にウィーン郊外のハイリゲンシュタットで二人の弟に宛てて遺書をしたためる。やがて失意の底から這いあがり、1803年に書き上げたのが交響曲第3番である。

この交響曲の〈英雄〉というタイトルは、ナポレオン・ボナパルト（1769～1821）に由来する。ベートーヴェンは、民衆の英雄として彼を崇拜していた。自筆譜に記されたタイトルも、最初は「ボナパルト」であった。しかし、彼が皇帝ナポレオン1世として即位したことを知ると、ベートーヴェンは激怒。ナポレオンへの献辞を抹消し、初版譜の表紙に「シンフォニア・エロイカ（イタリア語で「英雄交響曲」）」との作品名と「ある英雄の思い出のために」という言葉を記した。

交響曲第3番は、これまでの古典派の交響曲の2倍近い演奏時間を要し、ホルンも2本ではなく3本用いられて

いる。彼の個性がしっかりと刻み込まれたこの作品は、壮大でモニュメンタルな、いわゆる英雄様式の出発点として、彼の創作史に大きな意味をもつ。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 変ホ長調。第1番と第2番の交響曲では第1楽章に序奏をとまっていたが、この作品には序奏はない。音楽は和音を二つ打ち鳴らして始まる雄大なソナタ形式で書かれており、第1主題はチェロによって朗らかに示される。

第2楽章 葬送行進曲：アダージョ・アッサイ ハ短調。ハ長調の中間部をとまっており、三部形式と捉えることができる。

第3楽章 スケルツォ：アレグロ・ヴィヴァーチェ 変ホ長調。リズムカルなスケルツォ。トリオには、ホルンの三重奏が現れる。

第4楽章 フィナーレ：アレグロ・モルト 変ホ長調。序奏的な部分に続き、主題と七つの変奏が続く。この主題は、〈オーケストラのための12のコントラダンス〉の第7曲と、バレエ音楽〈プロメテウスの創造物〉の第16曲に由来する。変奏におけるフーガ的な書法は、さまざまな表情に満ちあふれている。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、ティンパニ、弦五部

5.19 [金]

金子建志（かねこ けんじ）・音楽学、指揮

ブルックナー

交響曲 第5番 変ロ長調 WAB 105（シャルク版）

作曲：1875～78年／初演：1894年4月9日、グラーツ／演奏時間：約63分

アントン・ブルックナー（1824～96）の交響曲が、本人の意志だけでなく、弟子達の助言や勇み足的な修正案を交えた複雑な状況で聴かれてきた歴史はよく知られている。中でも、特殊な経緯をたどったのが5番だ。作曲は、交響曲作家としての評価がまだ低かった1875～78年。ブルックナーは、初演のプランもないまま、芸術家としての創作意欲から交響曲を次々と書き上げていった。そうした中、7番（ニキシュ指揮、1884年12月30日初演）が大成功をおさめた。普通なら、これが大きな転機をもたらすはずだが、ブルックナーの周囲では「せっかく好転した評価を、未発表のまま埋もれている初期の交響曲を、時流に合わないスコアのまま初演することで覆されてはならない」という気運が支配的となり、ブルックナー自身も、それに従って自作の改訂に膨大な時間を費やすことになる。完成されたばかりの8番すら、クレームに遭い、ブルックナー自身が

大改訂。様変わりした第2稿で92年に初演された8番は、7番をも上回る決定的な大成功となるが、余勢をかって超大作5番を初演しようという流れにはならなかった。

5番は87年4月20日に2台ピアノ版による初演に漕ぎつけていたが、それで高い評価を得たならオーケストラによる初演が続いてもおかしくはなかったはず。しかし5番には、反ブルックナー派による以下のようなお決まりの批判、「時流とかけ離れた紋切り型の語法」「楽員の体力的な負担を無視した、非効率な楽器法」「うわばみのような長大さ」「転調の限界を証明するかのような総休止」等々、全てが当てはまる。つまり、ブルックナーが書いたままで初演すれば、ワーグナー的な語法に転じて受け入れられた7番、8番での勝利の進軍を、帳消しにされかねないという危惧が付きまっていたのだ。

そこで改訂版を作成したのが、弟子

のフランツ・シャルク。4番〈ロマンティック〉や8番でも弟子達の介入が指摘されるが、5番でのシャルクは、他の誰よりも大胆に振る舞い、オーケストレーションを根本から書き直してしまったのだ。全4楽章、全てのページに及ぶと言っても過言ではないこうした編曲は、ヴァージョン・アップというよりも、水彩画をほぼ同じ構図のまま油絵として描き直したような再構築に近い。

最大のおおなたの大鉦は、第4楽章の再現部を中心とする計122小節のカット。といっても高度な映画編集のそれに近いから、スコアを置いて聴かなければ気づかないが、原典版を聴き込んだファンは、「もうコードに入ってしまった?」と感じるはず。より派手な違いは、第4楽章コードに追加された金管の別部隊。欄外に「オーケストラの背後で」と指定されたこのバンダだけではなく、スコア本体にもシンバルとトライアングルが追加されている。

死の2年前、1894年4月9日にシャルク指揮で行なわれた初演(グラーツ)、95年12月8日レーヴェ指揮の再演(ブダペスト)とも、ブルックナーは立ち会っていない。高齢による体調悪化と歩行困難が原因なのは確かだが、シャルクによる改訂が、あまりにも意に反したものであったので、抗議の意味で聴きに行かなかったという説も

あるようだ。

他の交響曲と同様、1930年代になつて原典版が出版されるまでは改訂版しか出版譜が存在しなかったため、5番もシャルク版のみで演奏され続けたのだが、原典版の普及に伴って演奏頻度は完全に逆転。20世紀後半になると、シャルク版で演奏する指揮者は皆無になった。レコードに関してもクナッパーツブッシュが56年にウィーン・フィルと録音した英・デッカ盤以降、メジャー・レーベルでシャルク版を謳った新盤は見当たらない。ただし同盤の場合フィナーレのバンダや打楽器はシャルク版どおりなのだが、スケルツォ楽章後半にシャルク版にない大幅なカットがある。今回、そうした短縮処理ぬきでシャルク版のカットのまま演奏された場合、初演から40年間の5番の演奏現場にタイム・スリップすることになる。

第1楽章 変ロ長調 2/2拍子 序奏部付きのソナタ形式

ブルックナーに限らず、交響曲をピッツィカートで始めること自体が珍しいが、この5番では、後続する主要な楽想だけでなく、第2・4楽章もピッツィカートで始まる。この曲が「ピッツィカート交響曲」と呼ばれる所以だ。

ピッツィカートと金管のファンファーレによって、「世俗的な懊悩」対「絶対的存在としての神」という図式が顕

示された後、ヴィオラ+チェロよる第1主題が、肯定的な前進を始める。ピッツィカートが導く第2主題は、沈潜在的なモノローグ。木管による第3主題は動的な飛翔。この三主題構造は第1主題のヒロイックな高揚に収斂していく。シャルク版は派手な音色だけでなく、緩急のテンポ変化も激しいので、一段とドラマティックな追い込みを聴くことになる。

第2楽章 アダージョ ニ短調 2/2拍子 A-B-A'-B'-A"の5部形式

ピッツィカートと、オーボエによる哀歌の対立が、現世的な懊悩を暗示。後者は〈ローエン格林〉の「禁間の主題」の変容とされる。後半に進むに従って、フレーズは拡大していく。その大蛇のようなうねりこそは、ブルックナーの開拓したスーパー・アダージョの神髄。

第3楽章 スケルツォ 主部 ニ短調 3/4拍子 トリオ 変ロ長調 2/4拍子

両端楽章を循環形式に関連づける従来からの試みに加え、ここでは中間二楽章が共通主題で結びつけられる。快速の輪転型に姿を変えたアダージョ冒頭の主題に乗って木管が軽やかな新出主題を歌った後、テンポが落ち、弦が牧歌的なレントラーを導く。

スケルツォ主部は、この急・緩、二

つの流れを滑らかなギアチェンジで繋いでいくのだが、複合3部形式的なブリッジの谷間には、前衛的なリズムの掛け合いが仕掛けられている。トリオは〈ゴルトベルク変奏曲〉の最終変奏でバッハが引用したドイツ民謡〈お久しぶり〉によるコミカルな別世界。

第4楽章 フィナーレ 変ロ長調 2/2拍子 序奏部付きのソナタ形式

序奏部は第1楽章と同じピッツィカート音型で始まるが、原典版でのクラリネットと違いシャルク版ではトランペットが道化的に先導していく。ベートーヴェンの〈第九〉のフィナーレに倣って、前三楽章の主題を次々と再紹介していく。付点リズム主題が大暴れした後、弦がポルカ風の第2主題を導く。世俗的な喧騒が遠ざかった後、金管が燦然たるコラールを奏して新たな指標が示される。ここからは、プロメテウス主題を徹底的に展開した〈エロイカ〉のフィナーレを倣って既出主題を対位的に組み合わせ、交響曲史上最大級の大伽藍が築かれる。

全てを第1楽章の循環主題が統括するのは、ブルックナーの定石だが、このフィナーレは、それ以上にコードのコラールが重要。桁外れに長大な讃歌なので、シャルクがバンダで補強した気持ちもよくわかる。

楽器編成/フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(シンバル、トライアングル)、バンダ(ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ)、弦五部

5.26 [金]

5.27 [土]

5.28 [日]

柴田克彦 (しばた かつひこ)・音楽ライター

芥川也寸志

弦楽のための三楽章〈トリプティーク〉

作曲：1953年／初演：1953年12月4日、ニューヨーク／演奏時間：約13分

文豪・芥川龍之介の三男である芥川也寸志 (1925～89) は、1954年ソ連へ渡り、ショスタコーヴィチらの知遇を得て帰国後、ロシア音楽の影響を反映した明快かつシャープな作品を発表。幅広い活動で名を馳せ、映画音楽の傑作も多数生み出した。

この曲は、最初の注目作〈交響三章〉(1948) や出世作〈交響管弦楽のための音楽〉(1950) に続いて書かれた若き日の名作。1953年、N響の常任指揮者として来日したクルト・ヴェスの依頼で作曲され、同年米国のカーネギー・ホールにて、ヴェス指揮／ニューヨーク・フィルによって初演された。この後、芥川はソ連を訪問し、現地で演奏され、楽譜も出版された。

〈トリプティーク〉は「三連画」の意味。これは芥川が好んだポーランド出身の作曲家タンスマンの作品から採られたという。曲は、タイトルが示す通り、楽想に共通性を有する急-緩-急

の3楽章構成。和のテイストもまじえながら、モダンな和声、機知に富んだ旋律、澁刺たるリズムをもった、粋で歯切れよい音楽が展開される。

弦楽器の用法も巧みな本作は、弦楽オーケストラの重要レパートリーともなっている。

第1楽章 アレグロ 冒頭にユニゾンで奏される力強い主題を軸に突き進む、リズムカルで躍動的な楽章。流麗な主題など複数の旋律が加わり、ヴァイオリン独奏も登場する。

第2楽章 “子守歌”、アンダンテ 弱音器を付けて奏されるしっとりとした主題が流れゆく、叙情的な緩徐楽章。中間部では、楽器を手で叩く「ノック・ザ・ボディ」という奏法が用いられる。

第3楽章 プレスト 祭囃子の太鼓を模した変拍子の主題が中心をなす、爽快な終曲。おどけた主題やアダージョの部分に変化を加える。

楽器編成／弦五部

ロドリゴ
アランフェス協奏曲 (ハープ版)作曲：1938～39年／初演：1940年11月9日、バルセロナ (原曲) 1974年8月24日、サン・セバスティアン (ハープ版)
／演奏時間：約21分

20世紀スペインの代表的作曲家ホアキン・ロドリゴ (1901～99、生年は1902年説もあり) が生んだ、ギター協奏曲の最高傑作。中でも第2楽章の主題は、ジャズやポピュラー音楽にアレンジされ、広く親しまれている。ギター協奏曲は、もともと古い時代の小編成作品しかなく、本作および同時期に書かれたイタリアの作曲家カステルヌオヴォ＝テデスコの協奏曲が、オーケストラとの真の協奏を実現した先駆的作品といわれている。

「アランフェス」とは、マドリードから47キロ南の高原地帯にある土地の名。16世紀頃から宮廷の離宮が置かれたオアシス的な場所で、4歳で失明したロドリゴは、若い頃に訪れた際、同行した夫人の説明と共に当地の空気を味わった。そしてその感覚をもとに、スペイン内戦 (1936～39) の間に過ごしたドイツのフライブルクで創作を開始、マドリードに戻った1939年に完成した。なお作曲家自身はギターを弾けないため、スペインの大家デ・ラ・マーサから技巧面の助言を受け、翌年の初演の独奏も献呈を受けた

デ・ラ・マーサが務めた。

ロドリゴは、曲について「憂愁につつまれたゴヤの影、貴族的なものど民衆的なものが溶け合っていた18世紀スペインの宮廷の姿」を描いたと語っており、民俗情趣と共に漂う古雅な香りや哀愁が魅力をなしている。

ハープ版は、多くの新作誕生に寄与したスペインの大奏者ニカノール・サバレタ (1907～93) の依頼で、ロドリゴ自身が編曲したもの (1974年にサバレタが初演)。ギターよりも強まる柔らかさや神秘的な美しさが、新鮮な感触をもたらす。

第1楽章 アレグロ・コン・スピリト 冒頭でかき鳴らされるリズムが全体を支配する中で、二つの優美な主題が展開される、スペイン情趣に充ちた音楽。

第2楽章 アダージョ イングリッシュ・ホルンの憂いを帯びた旋律を独奏が引き継ぎ、静謐なムードを湛えた音楽がじっくりと奏されていく。

第3楽章 アレグロ・ジェンティーレ 明るく軽妙なロンド・フィナーレ。歯切れよい主題が管弦楽と独奏で交互に奏され、変奏曲風の展開をみせる。

楽器編成／フルート2 (ピッコロ持替)、オーボエ2 (イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、弦五部、独奏ハープ

ブラームス

交響曲 第1番 ハ短調 作品68

作曲：1855～76年／初演：1876年11月4日、カールスルーエ／演奏時間：約45分

ドイツ・ロマン派の巨匠ヨハネス・ブラームス（1833～97）が、20余年に及ぶ紆余曲折の末、43歳にして世に出した最初の交響曲。ロマン派の同ジャンル屈指の人気作でもある。完成が異例なほど遅くなった要因は、彼が生来もつ慎重さや自己批判の強さに加えて、ベートーヴェンの後に交響曲を作る必然性を問い続けたことにあった。その一つの解答としてようやく生み出したのが、古典的形式美とロマンの感性が見事に溶け合った本作である。

最初の構想は1855年頃といわれているが、20年もの間書き続けていたわけではなく、まずは断続的に作曲し、1862年に第1楽章の原型を完成後、また中断。1874年に本腰を入れ、2年をかけて完成した。そして1876年カールスルーエにて初演され、当時随一の指揮者でピアニストのハンス・フォン・ビューローから「ベートーヴェンの9曲に次ぐ“第10交響曲”」と賞賛された。

この曲は、ベートーヴェンの“苦惱から歓喜へ”の精神を継承しており、ハ短調からハ長調に至る〈運命〉交響曲と同じ構成を持っている。しかしな

がら、重厚さと歌謡性を併せもったブラームスの個性が漲る音楽であり、ずっしりした手応えと充実感はまさに比類がない。

第1楽章 ウン・ポーコ・ソステヌート～アレグロ ティンパニの連打が印象的な、重く分厚い序奏の後、劇的な主部に移行。二つの主題を中心に、緊張感を保ちながら進む。

第2楽章 アンダンテ・ソステヌート 歌謡的で寂寥感が漂う緩徐楽章。後半にはヴァイオリン独奏も登場し、ホルンと美しく絡む。

第3楽章 ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ 一般的なスケルツォではなく、ブラームスらしい優雅な間奏曲風の楽章。柔らかな主部に、激しさを加えた中間部が挟まれる。

第4楽章 アダージョ～ピウ・アンダンテ～アレグロ・ノン・トロppo・マ・コン・プリオ 本楽章のみトロンボーンが加わる。重く劇的な序奏から、ホルンのフレーズで暗雲が晴れた後、主部へ移り、流麗な主要主題が登場。複数の素材をまじえながら推進力溢れる展開を続け、壮麗な盛り上がりを見せる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部